

第2節 日本人大学生の短期海外留学の教育的効果の分析

田中真奈美

要約

この節では、海外短期留学が、どのように学生に影響を与えるかについて調査し、考察した。本研究では、短期留学が参加学生にどのように影響するのか、異文化理解能力が変化するのか、自文化に対する意識がどう変化するかなどを考察することを目的とする。調査は、志望動機書の分析、質問紙による事前アンケート調査、オリエンテーション等の参与観察、留学中の参与観察と半構造化面接、帰国後の事後アンケート調査を行った。面談で得られたデータはパティシペトリメソッドを用いて分析し、WHY 答法を取り入れたアンケートで得られたデータは、自由記述部分などを含め、分析を行った。結果から、留学という経験を通し、国際・異文化理解能力が育成できる、異文化理解のための行動目標が達成できるという仮説が導き出された。

キーワード

短期留学、異文化理解、自文化の再認識、異文化コミュニケーション、他者理解

1. はじめに

2008年に文部科学省が策定した「留学生30万人計画」にも見られるように、日本では国際化、グローバル化が進められている。日本の各大学では、色々な形の留学プログラム、海外ボランティア、インターンシップを実施してきている。日本の約7割の大学では、学生を1、2月派遣する短期留学プログラムを実施している(横田他2006)。先行研究では、海外留学や海外滞在の色々な教育効果が指摘されている。

Kitao (1993) は外国語運用能力の向上を、川内 (2006) は異文化適応能力の向上を挙げている。Tanaka (2003) は、海外子女の教育問題を取り上げ、第二言語である英語の習得と母語維持の問題を取り上げている。工藤 (2009) は4週間の短期語学研修プログラムをグランデッド・セオリーを用いて調査し、具体的な改善点を提言している。しかし、1か月以下の短期留学の効果を検証したものはあまりない。

本研究では、短期留学が参加学生にどのように影響するのか、異文化理解能力が変化するのか、自文化に対する意識がどう変化するかなどを考察することを目的とする。将来、教育者となる大学生が、異文化理解能力を高めることは大切であり、在住外国人が増加している日本で、外国人や異文化と関わらなく生活することは不可能である。また、国際化が進んでいる現在、異文化を知り、自文化を知ることは重要であると考えられる。

しかし、日本はまだ、国際化が進んでいるとは言いがたい。将来の指導者である大学生にどのような異文化理解力をつけさせればいいのかは大きな課題である。研究結果を分析し、考察することによって、今後の国際交流事業への課題提供、将来教育者となる学生指導への指針になると考える。

2. 研究の意義

国際交流・短期留学に関する研究は質的研究が多く、量的データを用いたものはあまり多くない。今回、アンケート調査を半構造化面接にあわせて行うことにより、短期留学が与える影響を量的に分析することは学術的にも重要である。

文部科学省により国際化が推進されている近年、短期留学の効果を研究することは、意義があると考えられる。しかし、留学の効果が先行研究等であまり実証されていない。将来教育者となる学生の異文化理解能力が短期留学や海外ボランティアによってどのように高められるかを検証し、短期留学の教育的な効果を検証した。

3. 方法

本研究の参加者は2009年にニューヨーク郊外にあるホフストラ大学への短期留学プログラムに参加した学生15名である。

(1) 研究手順

- ① 2009年ホフストラ大学短期留学参加学生に研究の趣旨の説明をし、同意を得た。
- ② 先行研究で指摘されている短期留学に関する要素を基に質問項目を作成した。
- ③ 次の調査を行った。

1) 志望動機書の分析、2) 質問紙による事前アンケート調査、3) オリエンテーション等の参与観察、4) 留学中の参与観察と半構造化面接、5) 帰国後の事後アンケート調査。

- ④ 調査結果を以下の方法で分析した。

(2) 分析方法

研究計画に基づき、データを収集する。面談で得られたデータはパティシペトリーメソッドを用いて分析する。WHY 答法を取り入れたアンケートで得られたデータ(自由記述部分など)の分析を行い、結果を検討する。留学前後の意識に変化がみられるか考察する。また、具体的な行動目標として、特に次の点に着目してデータの分析を行う。

- ① 英語に対する抵抗感がなくなる
- ② 経験から文化の違いを学ぶ力を身につける
- ③ 自文化に対する興味が強くなる
- ④ 他人を助けることに関心をもつ
- ⑤ 自分とは違うものがあるということが理解できる

4. 結果と考察

(1) 事前・事後のアンケート調査

アンケートから以下の結果が得られた。図1は、変化の見られた項目のみを取り上げ、グラフで表した。

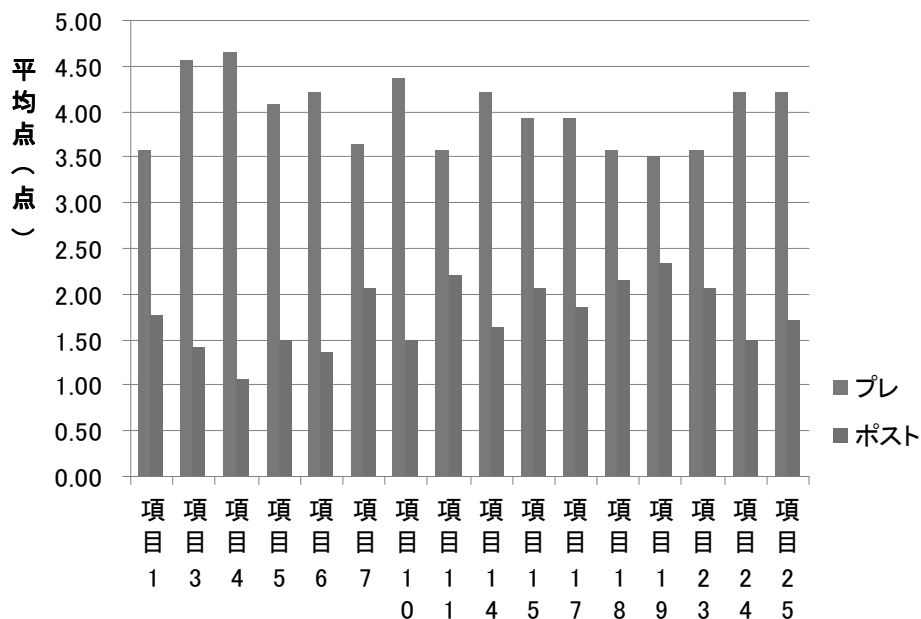


図1 事前・事後のアンケート結果の比較

それぞれの項目の質問内容は以下のとおりである。

- 項目 1. 誰でも外国語を話せるようになる。
- 項目 3. 言葉だけでなく、その文化を理解することが必要だ。
- 項目 4. 私は英語が上手に話せるようになりたい。
- 項目 5. 英語が出来たら、いい仕事に就くのもっと機会があると思う。
- 項目 6. 英語母語話者の友達が欲しい。
- 項目 7. 自分は異文化に理解がある方だ。
- 項目 10. 在日外国人と共生していくことは大切だ。
- 項目 11. 外国人に対していいイメージを持っている。
- 項目 14. 日本は海外に誇れる文化を持っている。
- 項目 15. もっと日本の事を勉強したい・知りたいと思う。
- 項目 17. 日本人であることを誇りに思う。
- 項目 18. 自分は何事にも積極的な方だ。
- 項目 19. 問題が起こったら進んで解決しようと努力する。
- 項目 23. 相手の気持ちを考えて、行動することが出来る。
- 項目 24. 色々なことに興味がある。
- 項目 25. 人と話をすることが好きだ。

それぞれの項目に対して、学生に、「よくあてはまる」、「まあまああてはまる」、「どちらでもない」、「あまりあてはまらない」、「全然あてはまらない」から一つを選んでもらった。その結果を、「よくあてはまる」を1点、「まあまああてはまる」を2点、「どちらでもない」を3点、「あまりあてはまらない」を4点、「全然あてはまらない」を5点とし、点数化した。

(2) 行動目標

それぞれの行動目標について考察する。

①英語に対する抵抗感がなくなる

アンケート調査より、「誰でも外国語を話せるようになる」、「私は英語が上手に話せるようになりたい」、「英語が出来たら、いい仕事に就くのにもっと機会があると思う」など英語に対する前向きな項目に関して変化が見られた。留学前はこれらの項目に対して高い評価をしていなかったが、帰国後のアンケートでは、これらの項目に対して「そう思う」という意識が高くなっていた。

半構造化面接より、「知っている単語をつなげれば、くみ取ってくれる」、「もっと英語通じないと思ったけど意外といけた」、「リスニング力が伸びたし、少しは理解できるようになった」など英語が通じた喜びを感じた発言が多くあった。そういう体験から、もっと英語がしゃべれるようになりたいという意識が高まったことが分かった。「日々の生活から英語を取得したい」、「英語を学んでみたいと思った」、「英語をもっと勉強したいと思った」など短期留学を機会に英語への学習意欲が向上したことが伺える発言も多く見られた。帰国後、「英語をもっと勉強したい」と話す参加学生は半数を超えており、その内数名は英語の勉強を続けている。

「聞いてくれる姿勢があるから、自分も聞かなくてはと思った」や「正確でなくても伝わればいいと思えるようになった」などのように、英語を上手にしゃべることが目的ではなく、コミュニケーションが大切だと実感した意見も多くあった。留学初日は、ファーストフード店で注文が上手く伝わらずショックを受けていた学生がほとんどであったが、1週間を過ぎる頃には、問題なく注文できるようになっていた。この例も英語が上達したというより、コミュニケーション力が上達したためだと考えられる。

英語の難しさを実感した発言として、「ジェスチャーや表現を使うと伝わるが、電話は難しい」というものがあった。電話は相手が見えない会話であるため、英語力が必要とされる。電話での会話の難しさから、コミュニケーションには非言語であるジェスチャーやアイコンタクトや表情が大切だということを学んだようである。

②経験から文化の違いを学ぶ力を身につける

アンケートより、「在日外国人と共生していくことは大切だ」と「外国人に対していいイメージを持っている」の項目に変化が見られた。海外で異文化を体験し、アメリカ人との関わりから、日本以外の国や文化を体験し、そこから、在日外国人との関わりについて改めて考えたようである。半構造化面からも、「黒人に対する偏見がなくなった」と言った学生がおり、文化の違いを感じ、変化していったことが分かる。

日本とアメリカの文化や考え方の違いを短期留学を通して学んだ。ある学生は、「綺麗さの基準が違うと思う。寮の部屋のバスルームは日本人の私たちには汚いし、タオルに虫が付いていたのもびっくりだった」と話してくれた。また、ある男子学生は、「謝らないよね。確実に相手が悪い場合でも。それがこちら流なのかな」と語った。多くの学生が、時間にいい加減であることを挙げていた。バスの時刻表はあってないようなものであるし、来ると言っていた時間に来ないなど日本との違いを挙げていた。しかし、自文化である日本を基準にアメリカを否定した表現はなく、文化により基準が違うことを感じ、学んだようである。

第6章 未来型のこどもの 異文化理解 と促進法

アメリカの良かったところとして、「Thank you とよく聞く」、「アルコールには厳しい。でもいいことだと思う」、「タバコを吸う人は少ない」、「人と目が合うと笑う。温かくていい」を挙げていた。きちんと違いを認識し、アメリカ文化のいい部分も評価していた。「Thank you とよく聞く」と言った学生は、「何かしてもらった時にありがとうと言われるとうれしいと思う。関係がやわらかくなると思うので、日本に帰ってからもやりたいと思う」と話していた。帰国後3ヵ月後にその学生に尋ねてみたところ、「なかなか難しい、習慣になっていないから。でも、言うようにしている。やっぱり、ありがとうと言うと、相手も嬉しいみたい」と話してくれた。

③自文化に対する興味が強くなる

アンケートより、「日本は海外に誇れる文化を持っている」と「日本人であることを誇りに思う」の項目に変化が見られ、興味が強くなったことが分かった。ニューヨークで、「中国人ですか」と聞かれることがほとんどであった経験や人種を聞かれる経験などを通し、日本人であることを自覚する機会が多かったことが影響していると思われる。

半構造化面接では、日本のいいところとして、「日本は整備されている。地下鉄のシステムやトイレなどはすごくきれい」や「日本の方がバスの中の案内とかが丁寧」を挙げていた。日本では、電車やバスの中には次の停留所や駅を案内する掲示板等が普通であり、それに加えてアナウンスもある。しかし、ニューヨークでは、地下鉄の中では掲示板が壊れていることも多かったので、その違いを感じたようである。また、ニューヨークの地下鉄の改札を見て、「えっ、遊園地の入り口みたい」と言った学生がいた。ニューヨークの地下鉄は、日本と比べるとシステムは新しくはない。プリペイドカードも磁気式の旧式を使用している。日本のスイカやパスモに慣れている学生たちにとって、世界の中心であるニューヨークの地下鉄が日本より遅れていることに驚いたようであった。同時に日本のシステムが整備されていることを実感し、ちょっとした誇りを持ったようである。

留学を通して、「日本のいいところを再認識できた」や「日本が好きと分かった。愛国心があると思った」という意識を実感している。外国に出てみて、初めて日本を外から見る機会を得た学生にとって、日本という国を実感するいい機会となった。日本のいいところやアメリカとの違いを実感し、日本に対する思いが強くなったと言える。

反対に日本の良くないところとして、「日本は知らない人に声をかけない」という意見を挙げている学生もいた。「町で困っている人を見ても声をかけないですね。でも、ニューヨークでは僕たちが困っていると声をかけてくれる人がたくさんいた。もちろん、だまされるかも思ったけど、そういう人には会わなかったし。それに、こちらから声をかけても親切に教えてくれる人がほとんどだった」と話してくれた。

④他人を助けることに関心をもつ

アンケートより、「人と話をすることが好きだ」という項目に変化が見られた。他人に関心を持つ程度が上昇していると言える。アメリカで大学生を始め、色々な人と話す機会があった。それまでの生活ではなかなか話す機会がなかった人達との交流が違うことや新しいことに興味を持つきっかけになったようである。

留学後の報告会から、「町で迷っている外国人に声をかけるようになった」や「留学前より関心を持つようになった」など他人と関わることやコミュニケーションを取ることに興味や関心が

第6章 未来型のこどもの 異文化理解 と促進法

高まっていると言える。自分達がニューヨークで色々な人に助けられた経験から、今度は自分が助けてあげようと言う意識が高まってきたと思われる。一つの例を紹介したい。あるゼミの時間にアメリカから来る高校生達を渋谷からホームステイ先まで送って欲しいと学生達にお願いした。10人中8人は留学を含め海外経験がある。その8人は、スケジュールブックを調べ、何とか予定を調整できないか相談を始めた。海外経験のない2人が、「どうしてタクシーを使わないのですか。それに、僕たちの交通費、出るんですか」と聞いてきた。海外経験のある8人は自分達が海外で助けられた経験があるので、何とかしてあげたいという思いがあったが、経験のない2人にはその気持ちが分からなかった。これも海外経験から得られた一つと言える。

⑤自分とは違うものがあるということが理解できる

アンケートより、「色々なことに興味がある」、「自分は何事にも積極的な方だ」、「問題が起こったら進んで解決しようと努力する」などの項目に変化が見られた。アメリカでの短期滞在中で、やればできる、何とかなるものだという経験をしている。そういう経験から、自信が生まれ、前向きになり、行動的な部分が出てきたと思われる。

半構造化面接より、「日本とは違うんだという事が抵抗なく受け入れられるようになったと思う」や「前は嫌と思ったが、それぞれに理由があり、文化があるんだと理解できるようになった」と違いを受け入れられるようになってきたことが分かる。これらの経験は大学生活や教育実習でも役に立っている。ある学生は、「前は嫌だと思っていたクラスメートに対して、彼には彼なりの思いがあるんだと思えるようになった」と話してくれた。また、別の学生は、「実習先で一人だけ違うことをしている園児がいたんですが、前ならただ変わった子どもと思ったと思うけど、今はその子が何を考えているのか、理解したいと思うし、興味があります」と言っていた。

5. まとめ

本研究から、海外という全く異なった環境が自身を振り返るいい機会となり、今まで考えなかったこと、思いつかなかったこと、自分とは違う考えがあるということを総合的に経験することができたことが明らかになった。また、それらの経験を帰国後の生活の中で生かしている。町で困っている外国人に声をかけるようになったり、自分とは違う人のことを考えようとしているのもその現れであると言える。

文化には国の違いだけではなく、日本の中でも東西の違いや、世代の違いがある。また、海外の文化に触れることにより、自文化を再認識することができた。異文化理解には、自文化をきちんと認識することが大切であるという認識が芽生えたことが確認できた。日本人である意識しなければならなかった経験から日本人であることに誇りを持ったり、日本のいいところを発見したりと海外に出ることによって、日本を外から見る経験ができた。

これらの結果から留学という経験を通し、国際・異文化理解能力が育成できる、異文化理解のための行動目標が達成できるという仮説が導き出された。

異文化理解能力は次世代の子どもにとって重要である。幼児・児童の教育に携わる教育者・指導者が異文化理解能力を養い、教育に生かしていくことには意義がある。留学という経験を通し、異文化理解能力やコミュニケーション力が育成できるという仮説から、それらの能力を有した指導者を通して、幼児・児童の異文化理解能力、コミュニケーション力が育成できると考える。

第6章 未来型のこどもの異文化理解と促進法

また、留学経験がなくても留学経験のある学生とのシンポジウム、在住外国人、留学生との交流を通して、異文化理解能力を育成できる。今後、そのための提言を行いたいと思う。

6. 参考文献

- 川内規会 (2006) 「大学生の異文化適応と心理的不安の変化に関する研究」『青森県立保健大学雑誌』7巻1号、p37-43
- 工藤和宏 (2009) 「日本の大学生に対する短期海外語学研修の教育的効果—グランデッド・セオリー・アプローチに基づく一考察—」『スピーチ・コミュニケーション教育』Vol 22 日本コミュニケーション学会 p117-139
- 横田雅弘、白土悟、坪井健、太田浩、工藤和宏(2006)『岐路に立つ日本の大学—全国四年制大学の国際化と留学交流に関する調査報告』(文部科学省科学研究費補助金(基盤研究 B)平成 15—17年度調査・最終報告書)一橋大学留学生センター
- Horwitz,E(1987) “Surveying Students Beliefs About Language Learning” In wander A.and Rubin J Eds, *Learner Strategies in Language Learning* 119-129 London:Prentice-Hall
- Kitao, K.S. (1993). “Preparation for and results of a short-term overseas study program in the United States” *Bulletin of the Institute for Interdisciplinary Studies of Culture*, 10, 107-118.
- Tanaka, M. (2003) “Educational Experience of Japanese Overseas Junior-High and High-school students in the United States” *Nichibei Times*